

〔曲名〕 Chez 1a Marquise

侯爵夫人の館にて

〔曲種〕

小規模のマンドリンアンサンブル

〔作曲者〕 E.Mezzacapo

エドアルド・メツァカーポ

〔編曲者〕

作者はイタリアのマンドリニストで十九世紀の終わりにバリーに出てマンドリンの教授と多くのマンドリン佳曲を書いた。

1901年には英国ロンドンを訪れ数年其処の婦人合奏団の指揮とマンドリンの教授をした。

かのマルチェルリと共に共演したのはこの頃である。

1912年には再びバリーに帰り作曲家として又音楽学校の教授、ロンバルド・エステュディアンティーナの指揮を勤めた。

小規模のマンドリンアンサンブルに多くの佳曲があり我国では「アンダンテとポロネーズ」、「ナポリ・タランテルラ」、

「ゴンドラ漕手の唄」等が好んでよく奏かれた。

本曲もその一つであるが、その頃のフランスの上流社会に多くの門弟を持ち、そうした人たちに喜び迎えられのような趣味の作品が多い。

従って技術的に困難さを感じずるものは少なく、環境が作品を生むよい例である。

フランス国籍であるが、出身がイタリアであるので純粋なフランス作家より旋律が豊富で初期のマンドリン音楽の代表的な作家の一人である。

本曲はロココ趣味にイタリアの甘味をふりかけたような作品で現代の人が好む刺激的なものは何もないが之は之で結構美しい。

「侯爵夫人の館にて」という題名であるにもかかわらず献げたのが Andr'e Mniszech伯爵夫人であるのが了解し難いところであったが、

表紙絵を見ると明らかにフランス十八世紀（ルイ十五世）の服装でこの絵が内容を示すものであればそ

の頃の上流社会のサロンを写したものである。

些（いささ）か余談になるがそうとすれば侯爵夫人を代表するものはルイ十五世の寵姫（ちょうき＝お気に入り）の女）ポンパドゥール夫人を指す。

彼女は傾国の美女として史上に著名であるが、

その美しさについて当時の多くの宮廷画家の描いた肖像画を「歴史家として不偏不党性を失わずに見ることは困難である」と言われ、

彼女は自然の傑作だったのか、或いは画家の傑作だったのかと言われる程に美しかった。

而（しか）も教養高く哲学者たちに彼女を仲間だと主張させる程の知的能力を持ち、

ギターをよくしたバリトン歌手ジェリオットに歌を、クレビヨンに話法を学び、歌、踊り、演技は舞台の花形女優に匹敵するものがあったとゆう。

又熱狂的に賞讃されるほど巧みにハーブシコードを演奏したとゆう。

彼女の名前は扇、結髪、衣服、ソファ、ベッド、椅子、リボン、磁器などにつけられロココ文化の女王となり更にヨーロッパの芸術にあまねく影響力を持った。

彼女は最高級品の衣装と宝石で身を飾り私室は水晶、金銀の化粧道具の数々で輝き、

象牙細工の家具ドレスデン、セーブル、中国、日本産のより抜き陶器で飾られ、

銀とガラスの堂々たるシャンデリアが灯されそれらのシャンデリアは壁にはめ込まれた大鏡に反射したとゆう。

この絵はまさにそうしたものを写したもので卑賤（ひせん＝身分・地位の低いこと）の身の想像も及ばないところである。

宮廷画家ラ・トゥールの描いたパステル画の肖像は美と智の極致を写しクレオパトラや楊貴妃も影がうすいとさえ思わしめる。

あらぬ方向に解説が飛んで了ったがまずそんなところを偲んで弾いて頂くと同じものでも面白くなる。

作者は容易なギターパートを別に書き加えているが技術的には大差なくこの方がよい。

猶（なお）本曲と同様の傾向のものにポンパドゥールガボットとかルイ十五世等がある。

1970年11月30日発行

イタリアマンドリン百曲選第9集より